



Title	現代日本語交感発話の社会語用論的研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	肖, 潔
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15525号
Issue Date	2023-03-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89363
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Jie_Xiao_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 肖 潔

主査 教授 加藤重広
審査委員 副査 教授 李連珠
副査 准教授 山口未花子

学位論文題名

現代日本語交感発話の社会語用論的研究

当該領域における本論文の研究成果

本論文は、現代日本語に見られる交感発話を広くとらえ、その実態や特徴を主に社会語用論の立場から多角的に記述・分析した論考である。phatic communion は、文化人類学者の B.マリノフスキーや、言語学者の J.R.ファース、また、R.ヤコブソンが論じているが、言語学の基礎知識として言及されるにとどまることが多く、これまであまり発展的かつ応用的な分析はなされてこなかった概念である。本論文は、これを現代日本語に適用して社会言語学・社会語用論の一環として深く掘り下げて論じた点で先駆的な新奇の論考になっている。また、シュグロフなどの会話分析の手法も取り入れて、広くデータを分析している点で、これまでの研究とは異なる意義を有すると評価できる。

本論では、まず phatic communion の成り立ちから説き起こし、交感発話の定義を確認するところから論考を始める。従来、交感発話には情報性が希薄だと言われてきたが、意味内容のある言語形式が用いられることが多いことを踏まえて、情報性以外に目的性・社交性・共感性といった観点を取り込んで評価できる枠組みを形成したことは重要な成果であろう。さらに、慣用表現としての挨拶表現はテンス分化の有無とスタイル分化の有無で形式的に区分することができるが、それらを幅広く記述し、分類・整理している。これまでも、部分的には記述と分類がなされているが、本論のように網羅的に、現在進行中の言語変化も広く含めて分類し、その本質に深く迫った考察は他に例を見ないと言える。

本論ではテンス分化を持つ場合タ形に認知上の遠隔性(remoteness)の効果と機能負担量(functional load)の低減、さらにポライトネスに関わる戦略の発露があると見ているが、その中核機能の一つにタ形による事態完了認識とそれに起因する発話内行為(illocutionary act)の成立があることを看破している点は重要な成果である。スタイル分化は、いわゆる丁寧体と普通体の文体対立を基本形とするが、これに形式上切替型と付加型が存在することを確認した上で、近年丁寧体の遠隔化を崩すことで親近感を醸し出す調整（「ネオ敬語」と呼ばれるものに相当する）を利用した新形式が見られることを指摘している。付加型では「です」やネオ敬語の「っす」の付加が可能でも、コンピュータの「だ」を付加することは避けるという非対称性があることを指摘したことは重要な成果と認められる。

従来の言語学の考え方では、交感機能を持つ発話は本論に相当する会話が始まる前に集約されると理解されてきたが、実際には、会話が進行する中でもポジティブポライトネスによる親近感とネガティブポライトネスによる敬避感を調整して表示することが行われ、それが命題レベルでなく語用論的な標識となる語句のレベルで表示されることを明らかにした成果は大きいと言える。会話の中では、一度交感性を確保すれば安定するわけではなく、常に交感性・有効性を確保し、弱化しないようにさまざまな方策を用いていることになる。

加えて、初対面の関係と知人関係では差異が見られること、初対面でも臨時的な関係と持続性が見込まれる関係では交感発話の使用に差異が見られることなどを、実際のデータの分析に基づいて分析している。家族など近い関係では、典型的な交感発話よりも非言語的なやりとりが多く現れることなども事例分析から指摘している点は重要な成果と言える。

学位授与に関する委員会の所見

本論文は、現代日本語を対象とする交感発話の研究として、新たな提案、重要な記述、分析に関わる創見などを含む、意義ある研究成果と認められる。データも近年公開された会話コーパスのほか、議会議事録などを利用し、現代の日本語の変化や潮流に迫る論考も示しており、定義や研究史、本質論に関わる理論的研究から、実際のデータ分析まで広汎かつ大部の研究になっている。成果の多くはこれまでの研究では見られなかったもので、新しい研究の射程を切り拓くものとして評価すべきものである。微妙な表現の使い分けとその背後に潜む表現意図や選択動機、聴者の解釈のずれなどを深く細かに分析している点は、分析を行っている申請者が非母語話者であることを意識させないほどである。

もちろん改善すべき余地が少なからずあることも事実である。例えば、イントネーションやパラ言語的な要素を含むマルチモーダル性が十分に考察されていないこと、論の流れの可視性を高められるように論述の構成方法を改善すべきこと、学術上の成果をわかりやすくアピールできるように説明記述を工夫する必要がある大いにあること、通時的な要因についてさらに認識を深めることが望ましいこと、などが審査委員会では指摘された。しかしながら、これらは評価の実質を決定的に左右する重大な瑕疵とは言えない。全国学会での発表やそれらを踏まえた論文などを業績として積み上げていることも踏まえ、審査委員会は全員一致して、博士（文学）の授与が妥当だという結論に達した。

以上